

中学校キャリア総合選択授業における乳幼児との触れ合い体験の効果と課題

The Effects and Issues of the Contact Experience Learning in the Career Comprehensive Elective Class for Junior High Schools

永田 夏来* 加納 史章**
NAGATA Natsuki KANO Fumiaki

本稿では、兵庫教育大学附属中学校にて2017年度及び2018年度に実施したキャリア総合選択授業「家族と地域について考えよう（家庭科）」にて子育て支援ルーム「かとう GENKi」との連携で行った、乳幼児との触れ合い体験の効果について検討した。分析の結果、結婚相手および子育てに対する意識の向上、乳幼児に対する高い関心の維持、保育に対するネガティブな印象の強化、といった特徴が示唆された。また、事前には高かった親性準備性が事後には低下する傾向も示唆されている。乳幼児への関心の高さと親性準備性の低さは一見矛盾する結果であるが、事前学習と相互評価を挟みながら中学生が育児支援施設を3—4回訪問するという反復・継続を主軸とした本実践の特徴を示しているように見える。保護者との関係を深める、個別のつながりを持つという経験は育児の厳しさや辛さを知ることになり親性準備性が低くなった。しかし同時に乳幼児との触れ合いを深めたことにより、育児への関心が減じることはなかったと考えられる。今後の課題として、選択授業であるために日常的に乳幼児と触れ合っている経験を持つ生徒が集まってしまうこと、サンプル数が少なくなり、検定・推定に限界があるという点が確認できた。

キーワード：触れ合い体験、親性準備性、中学生

Key words：contact experience, learning readiness to become a parenthood, junior high school students

1. 研究の目的と背景

1995年度に思春期保健福祉体験学習事業を実施した308市町村等を対象に状況調査を行った小長井によれば、乳幼児との触れ合い体験について家庭科を中心とする実施が全体の3分の2を占めている一方で、参加している教諭は養護教諭が家庭科教諭の3.5倍となっており、教員同士および学校—当事者間での連携が今後の課題として示されている（小長井1996）。

小長井が古くから論じているように、学習内容や時数確保などの兼ね合いからも家庭科は乳幼児との触れ合い体験実施の基盤となりやすいだろう。反面、育児を体験している当事者の窓口として家庭科教諭が適切に機能するかどうかはまた別の課題であり、そこに学内および地域間での連携という観点が浮かぶといえる。この点は乳幼児との触れ合い体験での課題として度々検討されており、兵庫県内における乳幼児との触れ合い体験の実施状況を調査した酒井は「学校、地域、行政、市民が連携する『子育て体験学習』の仕組み作り」が必要であるとした上で「より多くの人を巻き込み、長期的に継続可能な『学習』の機会をつくる」ことや「複数の場をつなぎ、コーディネートする人々への評価、人材の育成」および「リスクマネジメントの必要性」を論点として挙げている（酒井2009：53-54）。

こうした議論を受けて、筆者らは兵庫教育大学附属中学校にて実施されているキャリア総合選択授業「家族と地域について考えよう（家庭科）」にて子育て支援ルーム「かとう GENKi」との連携による乳幼児との触れ合い体験を2017年度、2018年度に実施した。キャリア総合選択授業とは、中学生のキャリア発達の促進を図るための教育課程として2年生・3年生を対象に設定されており、社会的自立に向けて育成すべき基礎的・汎用的能力と関連づけた選択授業である。毎年5月から10月まで（夏季休業を除く）の火曜日の3校時（10：50～11：40）の50分授業が計15回、これまで継続的に実施されてきた。一方、兵庫教育大学就学前教育カリキュラム研究開発室子育て支援ルーム「かとう GENKi」は、①0歳児～就学前、さらに小学校までの連携を含めた教育・保育内容の開発、②地域拠点としての子育て支援のあり方の検証、③就園前の乳幼児親子が安心して集える場の提供、大学の資源の有効活用による地域貢献を設置の目的としている（永田・加納・村田2018）。

地域のコミュニティとして親子が利用しやすい環境確保を志向する「かとう GENKi」と中学校でのキャリア総合選択授業を組み合わせることで、学校や地域、市民が連携した形で複数の場をつなぎ、乳幼児との触れ合いにおいて生じる事故やトラブルなどのリスクコン

*兵庫教育大学大学院人間発達教育専攻生活・健康・情報系教育コース 講師

令和元年10月25日受理

**兵庫教育大学大学院人間発達教育専攻幼年教育・発達支援コース 助教

トロールといった酒井の指摘する課題に実践的な回答を得ることができるのではないと思われる。一方で、家庭科およびキャリア教育としての学習の課題、すなわち、育児や子育ての実態を知ること、子供への関心を持つこと、将来的な出生への意欲を向上させること、などを通じて A) 自分の将来やキャリアについて考える、B) 子どもに親近感を持ち将来親となる自覚を深める、という効果については未知である。そこで本稿では、2017 年度、2018 年度キャリア総合選択授業「家族と地域について考えよう（家庭科）」にて実施した事前・事後のアンケートデータを用いて、子供に対する考え方や自分の将来についての意識がどのように変化したかを検討し、本実践における学習効果の特徴を把握することを試みる。

2. 調査方法とデータの特徴

・調査方法について

キャリア総合選択授業「家族と地域について考えよう（家庭科）」では、到達目標として、1) 日常生活を見直し、家族や家庭の機能について客観的に考える、2) 親子の関わりや触れ合いを通し将来について考え、育児力を養成する、3) 地域との連携をはかりながら、実践的な力を身につける、の3つを掲げている。

今回使用するアンケート調査は、このうちの2) 親子の関わりや触れ合いを通し将来について考え、育児力を養成する、という目標の達成を計量的に把握することを目的として、子供に対する考え方や自分の将来についての意識がどのように変化したかを検討するために設計された。このうちキャリア教育としての効果測定を中心とした A 項目として以下の5つ、A 1) 進みたい学校について A 2) 就きたい職業について A 3) 住みたい場所について A 4) 将来の結婚相手について A 5) 将来の子育てについて「よく考えるー全く考えない」の四件法で調べた。

また、乳幼児との触れ合い体験としての効果測定を中心とした B 項目として以下の8つ、B 1) 小さな子どもに興味がある B 2) 子どもを育てることは、やりがいのある仕事だと思う B 3) 赤ちゃんが好きである B 4) 将来、自分が親になることなんて、考えたこともない B 5) 子どもがいる家庭は、子どもがいない家庭よりも楽しいと思う B 6) 小さな子どものめんどろをみたり、遊んだりするのはめんどくさい B 7) 親となって子どもを育てると自由な時間が減って自分の好きなことができないと思う B 8) 将来、親となって子どもを育てたいについて「そう思うーそう思わない」の五件法で調査を行った。

アンケートは第1回の授業開始時および全ての体験終了後の2回に渡り、全く同じ項目を聞く形で実施され

た。調査は教室内にて行われ、回答は全て自記である。アンケートは匿名化した形で集計し、分析を行った。なお、アンケートの実施にあたり、事前に兵庫教育大学附属中学校に研究内容の説明及び依頼を行い、承諾を得ている。

・データの特徴

全部で15回の授業のうち、事前学習と相互評価を挟みながら中学生が「かとう GENKi」を3—4回訪問するという反復・継続が本実践における特徴の一つである。ここでは、ただ乳幼児と触れ合うだけでなく、保護者との関係を深める、個別のつながりを持つという経験が生まれることが期待されている。このような経験を通じ、保育の楽しさに加えてその厳しさと難しさを知り、自分の将来について具体的なイメージを持つことを念頭に授業設計がなされている。

なお、こうした基本的な授業の流れは2017年度および2018年度の両方で共有されているが、細かい実践の内容は両方でやや異なっている。2017年度には乳幼児および保護者を中学校に招待し、学内の案内や遊戯などを行ったが2018年度には学園祭への招待で代替している。また、2018年度には中学生の手作りおもちゃを用いた交流を行ったが2017年度にはこれを実施していない。こうした違いが持つ影響は今後の課題とし、本稿では2017年度における事前調査16名、事後調査13名のうち欠落3名を除いた13名分のデータおよび2018年度の事前調査、事後調査両方に回答した13名からなるデータを用いて分析を行う。

3. データ分析

・データの特徴

乳幼児の触れ合い体験の学習効果は、生徒が学習以前に乳幼児と触れ合う経験を持っているか否かで異なることがわかっている。佐藤は育児の経験が乏しい群では学習によって乳幼児イメージが具体的になり、育児の経験がある群では親の育児責任を強く認識するようになるという変化が認められたと報告している（佐藤2004）。キャリア総合選択授業「家族と地域について考えよう（家庭科）」は選択授業のため、今回の実践に参加している生徒は子供や家族に高い関心を持っていると推察できる。生徒たちの乳幼児への関心の高さは日常生活における乳幼児との接触頻度にも現れており、2017年度では「毎日ある」が23.1%「時々ある」が46.2%、2018年度では「毎日ある」が11.5%「時々ある」が61.5%となっている。乳幼児にあらかじめ関心が高いだけでなく経験もそれなりに有している生徒が集まっている点を踏まえておく必要がある。

また、伊藤らが示すように、乳幼児との触れ合い体験

の成果はジェンダーによって異なっており、特に男子生徒の実施には難しさがある（伊藤・倉持・堀内 2011）。今回は授業を選択した上でデータ化に至った生徒は全て女子であり、この点でも偏りがあるデータになっている点に留意されたい。

・ データ分析

(1) 自分の将来に注目したデータの記述

本実践はキャリア選択の授業であることから、自分の将来についての意識がどのように変化したかの A 項目について、キャリア項目である A 1) 進みたい学校について A 2) 就きたい職業について A 3) 住みたい場所について A 4) 将来の結婚相手について A 5) 将来の子育てについて「よく考える」か否かの回答を用いて検討する。これらについて 2017 年度と 2018 年度の結果を実践前と実践後で比較したのが表 1 - 5 である。データ数が少ないため統計的に有意な結果にはならなかったが、事前事後の変化としては以下のような結果を読み取ることができる。

まず、進学や就業といった将来設計に直接関わる項目については「時々考える」「よく考える」とするものがそもそも高く、2017 年度 2018 年度ともに、事前の状態両者の合計が 8 割を超えている。事後もこうした関心の高さが維持されている。表 3 に示した住みたい場所についても同様で「時々考える」「よく考える」が事前事後とも半数程度になっている。キャリア全般に関わる項目については学習による成果および変化が見えづらい結果となった。

結婚相手および子育てについては、まだ中学生であるということもあって「時々考える」「よく考える」は事前においてそれほど高くはない。しかし事後には結果が伸びており、2017 年度には結婚相手について「よく考える」としたものは事前には 7.7% であったのが事後には 23.1% と 16 ポイント程度増加している。また、子育てについては「よく考える」には変化が見られなかったが「時々考える」が 15.4% から 46.2% と 30 ポイントの増加があった。これらも統計上有意な結果ではないが、子育てを中心にキャリア形成を考えるという授業の目的はある程度成功したことを示唆するデータを得ることができたと言えるだろう。

表 1 進みたい学校について

		全く考えない	あまり考えない	時々考える	よく考える
2017 年度 (n=13)	実践前	0.0%	15.4%	38.5%	46.2%
	実践後	7.7%	0.0%	46.2%	46.2%
2018 年度 (n=13)	実践前	7.7%	7.7%	53.8%	30.8%
	実践後	7.7%	0.0%	61.5%	30.8%

表 2 就きたい職業について

		全く考えない	あまり考えない	時々考える	よく考える
2017 年度 (n=13)	実践前	0.0%	30.8%	30.8%	38.5%
	実践後	0.0%	30.8%	38.5%	30.8%
2018 年度 (n=13)	実践前	0.0%	7.7%	38.5%	53.8%
	実践後	0.0%	30.8%	30.8%	38.5%

表 3 住みたい場所について

		全く考えない	あまり考えない	時々考える	よく考える
2017 年度 (n=13)	実践前	7.7%	53.8%	15.4%	23.1%
	実践後	30.8%	23.1%	23.1%	23.1%
2018 年度 (n=13)	実践前	15.4%	46.2%	30.8%	7.7%
	実践後	7.7%	46.2%	30.8%	15.4%

表 4 結婚相手について

		全く考えない	あまり考えない	時々考える	よく考える
2017 年度 (n=13)	実践前	30.8%	46.2%	15.4%	7.7%
	実践後	46.2%	23.1%	7.7%	23.1%
2018 年度 (n=13)	実践前	23.1%	61.5%	7.7%	7.7%
	実践後	15.4%	53.8%	7.7%	23.1%

表 5 子育てについて

		全く考えない	あまり考えない	時々考える	よく考える
2017 年度 (n=13)	実践前	15.4%	46.2%	38.5%	0.0%
	実践後	7.7%	30.8%	30.8%	30.8%
2018 年度 (n=13)	実践前	7.7%	61.5%	15.4%	15.4%
	実践後	7.7%	30.8%	46.2%	15.4%

(2) 乳幼児との触れ合い体験に注目したデータの記述

次に乳幼児との触れ合い体験としての効果測定を中心とした B 項目として、B 1) 小さな子どもに興味がある B 2) 子どもを育てることは、やりがいのある仕事だと思う B 3) 赤ちゃんが好きである B 4) 将来、自分が親になることなんて、考えたこともない B 5) 子どもがいる家庭は、子どもがいない家庭よりも楽しいと思う B 6) 小さな子どものめんどろをみたり、遊んだりするのはめんどくさい B 7) 親となって子どもを育てると自由な時間が減って自分の好きなことができないと思う B 8) 将来、親となって子どもを育てたい、の 8 項目について見ていく

これらの質問は乳幼児に対する興味関心を聞いた 1 項目 (B 1))、乳幼児および育児に関するポジティブな印象についての 4 項目 (B 1)、B 2)、B 3)、B 5)) とネガティブな印象についての 2 項目 (B 6)、B 7)) 将来に関する 2 項目 (B 4) B 8)) からなっている。

ポジティブな印象についての 4 項目 (B 1)、B 2)、B 3)、B 5)) とネガティブな印象についての 2 項目 (B 6)、B 7)) をそれぞれを表 6、7 としてまとめた。また、将来についての 2 項目は B 4) 将来、自分が親になることなんて、考えたこともないと B 8) 将来、親となって子どもを育てたいをそれぞれ表 8、9 として示した。カイ二乗検定の結果、事前・事後のクロス表は 2017 年

度 2018 年度とも統計的に有意であることは確認できなかった。

表 7 に見られるように、育児や乳幼児そのものに対する関心は実践前も総じて高い。「小さな子どもに興味がある」は「そう思う」とした者の割合は 2017 年度、2018 年度ともに 69.2% となっており、「赤ちゃんが好き」も同様に 76.9% であった。事後には「小さな子どもに興味がある」が 69.2%、「赤ちゃんが好き」が 2017 年度には 84.6%、2018 年度には 76.9% と上昇あるいは高水準で維持されており、体験の有無にかかわらず小さな子供への関心は一貫している様子が示唆されている。「育児はやりがいがある」2017 年度では 7 割以上、2018 年度でも 7—8 割程度が「そう思う」と答えている。しかし 2017 年度においては事後に減少する傾向が示された。「子供がいる家庭は楽しい」は両年ともに「そう思う」が少ない傾向にあり、2017 年度では 69.2%、2018 年度では 46.2% であった。両年ともに事後では上昇傾向が見られており、乳幼児との触れ合い体験を通じてイメージが具体的になり印象が良くなったといった状況を伺うことができるだろう。

表 8 に示したネガティブな印象については、「小さい子はめんどくさい」「自由な時間が減る」とともに「そう思わない」が増加する傾向が観察できた。つまり、実践前は育児や子育てに対してネガティブな印象を持たないものが多かったが、実践後はネガティブな印象に転向した者が一定数いることを示唆していると言える。

将来に関する 2 項目、B 4) 将来、自分が親になることなんて、考えたこともない B 8) 将来、親となって子どもを育てたいは「そう思う—そう思わない」の全てを表 9、表 10 として以下に示した。他の項目と同様に統計的に有意ではないが、「親になるなんて考えたこともない」は 2017 年度 2018 年度ともに事前は「そう思わない—そう思う」に回答が分かれていたが、事後には「あまりそう思わない」または「わからない」が 7 割程度になるようになった。「親となって子どもを育てたい」は 2017 年度 2018 年度ともに「そう思う」が事後に上昇する傾向が見られており、「親について考える」ようになり「子供を育てたい」という意欲を持てるようになるという傾向が示唆されている。

表 6 ポジティブな印象（「そう思う」の割合）

		育児はやり がいがある	子どもがいる 家庭は楽しい	赤ちゃん が好き	小さな子に興 味がある
2017年度 (n=13)	実践前	76.9%	69.2%	76.9%	69.2%
	実践後	69.2%	76.9%	84.6%	69.2%
2018年度 (n=13)	実践前	84.6%	46.2%	76.9%	69.2%
	実践後	84.6%	53.8%	76.9%	69.2%

表 7 ネガティブな印象（「そう思わない」の割合）

		小さい子供は 面倒臭い	自由な時間が 減る
2017年度 (n=13)	実践前	61.5%	15.4%
	実践後	46.2%	7.7%
2018年度 (n=13)	実践前	53.8%	23.1%
	実践後	61.5%	15.4%

表 8 将来、自分が親になることなんて、考えたこともない

		そう思わない	あまりそう思 わない	わからない	ややそう思 う	そう思う
2017年度 (n=13)	実践前	30.8%	7.7%	38.5%	23.1%	0.0%
	実践後	15.4%	38.5%	30.8%	0.0%	15.4%
2018年度 (n=13)	実践前	0.0%	30.8%	30.8%	23.1%	15.4%
	実践後	7.7%	46.2%	30.8%	7.7%	7.7%

表 9 将来、親となって子どもを育てたい

		そう思わない	あまりそう思 わない	わからない	ややそう思 う	そう思う
2017年度 (n=13)	実践前	0.0%	0.0%	15.4%	15.4%	69.2%
	実践後	0.0%	0.0%	0.0%	15.4%	84.6%
2018年度 (n=13)	実践前	7.7%	0.0%	0.0%	38.5%	53.8%
	実践後	0.0%	0.0%	7.7%	30.8%	61.5%

(3) 親性準備性得点

B 4) 将来、自分が親になることなんて、考えたこともない、B 5) 子どもがいる家庭は、子どもがいない家庭よりも楽しいと思う、B 8) 将来、親となって子どもを育てたいは親性準備性を測る項目として広く用いられている（伊藤・倉持・堀内 2011、鎌野・伊藤 2010）。

親性準備性とは「親性（子どもをいつくしみ、育もうとする心性であり、幼少期から生涯にわたり、発達する、子の親であるかどうかに限らず誰もが持つ特性）の形成過程において親となる以前から段階的に形成される資質」（佐々木 2007:17）を意味しており、乳幼児との触れ合い体験の成果測る基準として多くの議論がなされてきた。

この 3 項目について 2017 年度および 2018 年度の事前データを用いて相関分析を行ったところ、「将来、親となって子どもを育てたい」と「子どもがいる家庭は、子どもがいない家庭よりも楽しいと思う」には正の相関が認められた ($r = .613 p < .01$)。また、「将来、親となって子どもを育てたい」と「将来、自分が親になることなんて、考えたこともない」には負の相関が認められた ($r = -.529 p < .01$)。「子どもがいる家庭は、子どもがいない家庭よりも楽しいと思う」と「将来、自分が親になることなんて、考えたこともない」については相関が確認できなかった。

年度を区別して検討しても同様の結果を得られたことから、「将来、自分が親になることなんて、考えたこともない」を逆転させた上で「子どもがいる家庭は、子どもがいない家庭よりも楽しいと思う」「将来、親となって子どもを育てたい」を合計し、親性準備性得点として得点化した。年度別に事前／事後を区別した得点の分布

を図1と図2に、基本統計量を表11に示した。

これらに見られるように2017年度および2018年度の両方で、事前に比べて事後において平均および中央値が低くなった上分散が低得点に向けて広がるという状況が見られている。厳密な検定は難しいが、キャリア総合選択授業「家族と地域について考えよう（家庭科）」を選択する生徒はあらかじめ親性準備性が高かったが、学習によって全体的に親性準備性が下降する効果を持つ経験を得ている可能性が示唆される。この背景の一つとして、外れ値の処理について指摘しておく必要があるだろう。親性準備性得点は事前と事後での変化が大きいケースがままあり、中には事前／事後で10点もの変化を示したものもある。今回は標本数が少なかったため

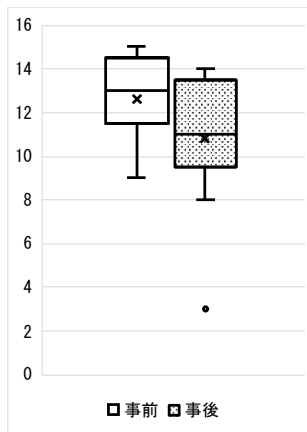


図1 親性準備性得点の変化（2017年度）

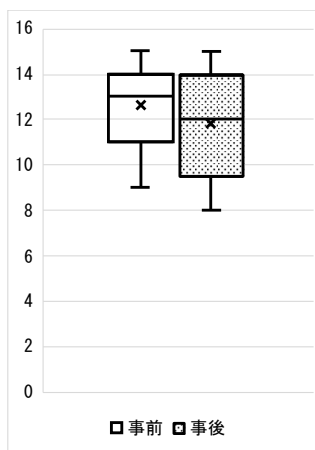


図2 親性準備性得点の変化（2018年度）

表11 親性準備性得点の基本統計量

	2017年度		2018年度	
	事前	事後	事前	事後
平均値	12.6	10.8	12.6	11.8
中央値	13.0	11.0	13.0	12.0
分散	3.3	8.6	3.3	5.5
標準偏差	1.8	2.9	1.8	2.3

にこうした極端な例を分析から除外することができず、その結果得点のばらつきが大きくなったと言える。

4. まとめと考察

本稿では、子育て支援ルーム「かとう GENKi」と兵庫教育大学附属中学校でのキャリア総合選択授業を組み合わせた乳幼児の触れ合い体験において、育児や子育ての実態を知ること、子供への関心を持つこと、将来的な出生への意欲を向上させること、といったキャリア教育および乳児の触れ合い体験を組み合わせた学習効果は見られるのかどうかについて、2017年度および2018年度に授業を選択した生徒合計26名による事前／事後のアンケート調査を用いた分析を行った。

その結果として、キャリア教育としての効果測定を中心としたA項目のうち、進学や就業、住みたい場所については事前事後とも「時々考える」「よく考える」とする傾向が維持されており、キャリア全般については学習による成果および変化が見えづらい結果が示唆された。反面、結婚相手および子育てについては事前においてそれほど高くなかった「時々考える」「よく考える」が事後には伸びており、将来的な出生への意欲を向上させるという本実践の目的については一定の成果を上げている可能性が指摘できる。

幼児との触れ合い体験としての効果測定を中心としたB項目において、ポジティブな印象に注目した「小さな子どもに興味がある」「赤ちゃんが好き」に対して「そう思う」とした者が2017年度2018年度ともに事前／事後で7割以上と高い水準で維持または増加の傾向を示唆しており、実践を経験した後も乳幼児に対して高い関心を持ちづけている様子が見えている。「子供がいる家庭は楽しい」については、事前から事後にかけて両年ともに上昇傾向が示唆された。ただし「育児はやりがいがある」については2017年度に下降傾向が示唆されていて留意が必要である。

ネガティブな印象については、「小さい子はめんどくさい」「自由な時間が減る」とともに事後「そう思わない」が減少する傾向が観察できた。実践前は育児や子育てに対してネガティブな印象を持たないものが多かったが、実践後はネガティブな印象に転向した者が一定数いることを示唆している可能性を示している。また、将来に関する項目である「親になるなんて考えたこともない」については「あまりそう思わない」が増加、「親となって子どもを育てたい」については「そう思う」が増加するなど、自分の将来に子供を持つことを組み込むようになる傾向をうかがわせる結果が見られた。

ただし、「将来、自分が親になることなんて、考えたこともない」を逆転させた上で「子どもがいる家庭は、子どもがいない家庭よりも楽しいと思う」「将来、親と

なっており、子どもを育てたい」を合計した親性準備性得点については、2017年度2018年度ともに、事前よりも事後において得点が低くなる傾向が示唆されている。これについてはデータの制約もあり分析を深めることが困難であったが、一つの可能性として記述をしておきたい。

もう一つ考慮する必要があるのは、中学生であっても育児経験がある場合、乳幼児との触れ合い体験によって親の育児責任を強く認識するようになるとの知見であろう（佐藤 2004）。キャリア総合選択授業「家族と地域について考えよう（家庭科）」は選択授業であるため、乳幼児との接点をもともと持っている生徒が多かった。このため育児の楽しさよりも親の責任に対する認識を強め、その結果、親性準備性の低下を招いたという可能性もあるだろう。

今回の分析から、育児の厳しさや辛さを知ったために親性準備性が低くなりながらも、乳幼児や育児への関心を高く維持している、という本実践の効果を推定することができるように思われる。

乳児との触れ合い体験学習やいのちの学習（思春期保健）を中心に中学生の親性準備性の学習効果を考察した先行研究によれば、人とのつながりによる共感された体験が重要であり、体験学習を通じて乳児とその母親に対する共感を学ぶことに意義があるという（伊藤 2019、藤原 2019）。事前学習と相互評価を挟みながら中学生が「かとう GENKI」を3—4回訪問するという反復・継続を主軸とした本実践では、乳幼児とただ触れ合うだけでなく、保護者との関係を深める、個別のつながりを持つという経験が生まれることがめざされている。このため、単発の触れ合い体験では親性準備性を高める効果が期待されている保護者への共感という学びが、さらに一歩進み、自分未熟さを認識するまでに至ったのかもしれない。中学生の発達段階を踏まえれば、この認識を起点として親への感謝や地域のつながりの大切さ、主体的な行動の大切さといったさらなる学びへつなげることが可能になるであろう。

5. 今後の課題

子育て支援施設とキャリア総合選択授業を組み合わせた形での反復・継続を主軸とした乳幼児の触れ合い体験は、乳幼児への高い関心を維持しながら子育ての厳しさを理解するという効果が期待できることが、本稿からは示唆された。他方、1) 選択授業であるために日常的に乳幼児と触れ合っている経験を持つ生徒が集まってしまう、2) 選択授業であるためにサンプル数が少なくなる、という課題を抱えており、検定・推定に限界が出ているというのが本稿の課題である。また、選択科目としての受け入れ人数を多くすると子育て支援施設のキャパシティを超えてしまい、安全管理など別のリスク

が生じてくる。適切な学習機会と効果測定とのバランスという問題は、酒井がすでに指摘していた学校、地域、行政、市民が連携する『子育て体験学習』の仕組み作りという乳幼児との触れ合い学習の課題を改めて浮き彫りにしたと言える。

参考文献

- 藤原美輪. (2019). 中学生の親性準備性学習の検討：地域で育む関係性と児童虐待予防との関連要因. 最新社会福祉学研究, 14, 21-44.
- 伊藤葉子・倉持清美・堀内かおる. (2011). 男子校中学・高校生の「保育教育に関連する意識」の調査：共学校との比較検討. 日本家政学会誌 62 (2), 125-131.
- 伊藤葉子. (2019). 中・高校生の親性準備性の発達と保育体験学習. 日本家政学会誌, 70 巻 (2019) 6 号, 321-327.
- 鎌野育代・伊藤葉子. (2010). 子どものイメージと自己効力感の変容からみる保育体験学習の教育的効果. 日本家庭科教育学会誌, 52 (4), 283-290.
- 永田夏来・加納史章・村田晋太郎. (2018). 中学生の「乳幼児との触れ合い体験」における家族機能の理解と育児力養成に関する研究. 兵庫教育大学「理論と実践の融合」に関する共同研究活動成果報告書.
- 小長井春雄. (1996). 思春期保健福祉体験学習事業の全国調査とその評価. 平成8年度厚生省心身障害研究：効果的な親子のメンタルケアに関する研究, 306-313.
- 酒井千絵. (2009). ひょうごの子育て体験学習の検証とその普及方策. ひょうご震災記念21世紀研究機構, 55.
- 佐藤洋美. (2004). 乳幼児とのふれあい体験学習が中学生の子育てに対するイメージに与える影響. 生活体験学習研究 4, 35-54.
- 佐々木綾子. (2007). 青年期の親性を育てる「乳児とのふれあい育児体験」の男女差に関する研究：心理・生理・内分泌学指標による検討. 福井大学医学部研究雑誌, 8, 1, 2: 17-29.

謝辞

本稿は兵庫教育大学2017年度「理論と実践の融合」に関する共同研究活動「中学生の『乳児とのふれあい体験』における家族機能の理解と育児力養成に関する研究」による成果の一部です。授業実践及び調査にご協力いただいた兵庫教育大学附属中学校と子育て支援ルーム「かとう GENKI」のスタッフ、利用者である乳幼児および保護者の皆さんに改めて感謝申し上げます。また、本稿の調査においては、兵庫教育大学附属中学校相川美和子先生に多大なご協力を賜ったことをこの場を借りて厚く御礼申し上げます。